

1 脳の三位一体学説から  
情動の役割を考える

2 中国における幼児  
メンタルヘルス教育の  
実践と研究

3 人を引き込む  
身体的コミュニケーション  
シモン技術

4 所有に関する  
行動の日中文化比較

5 ベビーマッサージと  
アタッチメントに  
ついての研究

6 親の期待と幼児の  
発達について

7 教育的視野の中の  
子どもの遊戯

8 赤ちゃんはヒトに  
興味をもつ

# 親の期待と幼児の発達について

## —中国11都市3000名の幼児の調査報告

周念麗

Zhou Nianli

華東師範大学副教授

### ●要旨

2008年6月から2009年2月にかけて、中国の東部、西部、南部、北部、中部の5地域11都市の1〜6歳児の保護者に、子どもの能力への期待に関するアンケート調査を行った。平均値から見ると、子どもの能力への期待は、高いほうから低いほうへ並べると「自律能力（自分を律する能力）」「ソーシャルスキル」「リーダーシップ」「認知能力」「自立能力（自分で自分のことをする能力）」の順であった。

この調査結果は、中国の若い保護者が就学前児童の自己コントロール・社会性・指導力の重要性を意識し始め、これまでの「知力発達至上」の意識が変わってきていることを示した。

しかし、11都市の1〜6歳児を持つ保護者の自由回答をまとめた結果からは、彼等が最も重視する問題は子どもの年齢が上がるにつれて、

生理的保健的な発達から心理的な発達へと移ってきてはいるが、どの年齢段階でも、1〜6歳児の認知的発達への重視の度合いが感情発達と社会性発達を上回っていることがわかった。

キーワード：中国1〜6歳児の親 子どもの能力への期待 重視する問題

### ●問題提起

中国の1〜6歳児の親は、中国の伝統文化や一人っ子政策の実施によって、その大多数が親の大きな期待を背負って成長してきている。私たちは1997年に上海と東京の1〜6歳児の親の子どもの能力への期待について大規模な調査を行った。「子どもが将来どのような学

歴を持つことを望むか」という質問に対し、東京の保護者は50%が短大・高専あるいは四年制大学と答え、残り50%の保護者はどんな学歴でもいいと答えた。一方、これと対照的なのは中国上海の保護者である。100%が自分の子どもは少なくとも四年制大学、そのうち50%はできるなら博士号を取ってほしいと考えている。このような高学歴への期待は、中国伝統文化の一つの縮図かもしれない。というのは二千年来、「学んで優ればすなわち仕える」（成績がよかったら官吏になれる）という思想や、「すべて皆下品なり、ただ読書高きがあるのみ（どの職業も下等である、ただ学問のある士大夫だけが上等である）」という理念が先祖代々父母の心に深く植えつけられているからである。

では、これら重い期待を背負った一人っ子の最初の世代が成長して父母になった後、自分の子どもに対し、能力面でどのような期待を抱くのであろうか。この期待と彼等の親世代が抱いていた期待との違いはどこにあるのだろうか。この疑問への答えを探るために、私たちは中国の東部、西部、南部、北部、中部から経済発展レベルの違う11都市を選んで1〜6歳児を持つ父母に対しアンケート調査を行った。

## ● 調査方法

### 1. 参加者

#### ① 地区サンプルの選定

地区サンプルの選定は主に以下2点を考慮した。すなわち代表的な地域であることと代表的な経済状況であることである。

地域的な観点からは、華東地区から上海、南京、杭州を選定した。華南地区から貴陽と福州を選定。華中地区からは武漢を選定した。華北からは天津、東北からは根河、長春、ハルビンを選定し、西北からは西安を選定した。

経済状況の観点からは、華東地区の上海、南京、杭州の3都市は発展地域に属し、貴陽と根河は全国でも経済が発展していない地区であり、その他の6都市はどれも中レベルの発展地域に属する。

#### ② 参加者の年齢

本調査に参加した各地の1〜6歳児の父親の年齢の範囲は32歳から36歳で、平均年齢は34歳。母親の年齢範囲は30〜32歳で、平均年齢は31歳である。これは若い父母の集団である。

#### ③ 参加者の学歴

本調査への参加者の学歴では、経済の遅れている内モンゴルの根河や貴州省の貴陽市の父親の学歴が中学校・高等学校を主としている他は、他の都市の父親の学歴は四年制大学が主で、修士号や博士号取得者もいた。

母親の学歴も父親の学歴と似通っており、根河と貴陽を除いて、他の9都市の母親の学歴は四年制大学と高等専門学校に集中している。

ここからわかるのは、本研究の参加者は高学歴を主とし、低学歴も混在する集団であるということである。

#### ④参加者の職業

参加した父親の職業は根河と貴陽以外の9都市において、公務員、企業経営者等、ホワイトカラーが主で、根河と貴陽のみがブルーカラーや無職を主としていた。

母親に関しては、長春、天津、西安、ハルビン、上海、杭州の都市において、主に科学教育従事者、公務員、企業経営者等、ホワイトカラーなど社会的・経済的地位が高い職業に集中し、根河だけは多くが無職の状態であった。南京と貴陽の母親の職業は比較的分散していた。

本調査の参加者には、社会的・経済的地位が比較的高い職業が多く、同時にさまざまな性質の職業も混在していた。

上記のことをまとめると、調査の参加者は中国のさまざまな経済地区、年齢を代表し、高学歴で社会的・経済的地位の高い職業に従事している者が多いが、さまざまな層の学歴と職業の人が少なからず存在する集団である。この集団の参加者は、現在の中国の1〜6歳児の父母、特に社会的・経済的地位の上位に属する父母の、子どもの能力への期待と心情を全面的に反映しているというべきである。

#### ●調査内容

調査内容は2部から構成される。1つは子どもの能力への期待に関する照合表 (check list) であり、5段階評価 (five point) 法をとっている。「気にしない」から「とても期待する」まで、相応する点数は1〜5ポイントである。2つ目は自由回答式 (open-end test) 質問である。保護者に、自分の子どものどの面の発達にもっとも関心が

あるか尋ねた。

私たちは1〜6歳児の保護者10人へのインタビューを通して、子どもの能力への期待に関するチェックリストを作成した。因子分析 (factor analysis) を通して、5つの因子にまとめた。具体的内容は以下のとおりである。

#### 因子1 自律能力 (自己を律する能力)

- ◎小遣いの浪費をしない
- ◎気に入っているおもちゃを友達に貸すことができる
- ◎許可を取ってから何かをする

#### 因子2 ソーシャルスキル

- ◎大人が話している時にむやみに口をはさまない
- ◎小さな動物や他の人に同情し、手助けをする
- ◎先生や家の人に進んで挨拶することができる

- ◎手助けされたときに進んで進んでありがとうと言える
- ◎自発的に並んで待つことができる

#### 因子3 認知能力

- ◎簡単な英語の単語が言える
- ◎10までの数字を知っている
- ◎簡単な漢字が読めて書ける

- ◎長針と短針で示す時計が読める

#### 因子4 自立能力 (自分で自分のことをする能力)

- ◎一人で1時間留守番することができる

◎戸外で一人遊びができる

◎あまり鋭くないハサミを一人で使うことができる

◎夜、一人で眠ることができる

#### 因子5 リーダーシップ

◎友達と意見が違ったとき説得できる

◎友達の間でリーダーになれる

◎友達とけんかした後、自己の感情をコントロールできる

◎友達の間で人望がある

信頼性検査を行ったところ、本アンケートの内部一貫性信頼性係数は0.72であった。これはこの調査が比較的信頼性の高いアンケートであることを示している。

## ●調査結果

### 1. 子どもの能力への期待調査の結果

表1は11都市における参加者の子どもの能力への期待チェックリストを選択した結果を示している。

表1から、11都市の1〜6歳児の父母の子ども各種能力発達への期待値は高いほうから、「自律能力」「ソーシャルスキル」「リーダーシップ」「認知能力」「自立能力」の順であることがわかる。私たちはこれまで、中国の保護者は子どもの認知能力を最も重視していると認識していたが、この結果は、それとは違っていて、いささか意外である。

しかし、子どもの「自立能力」への軽視はこれまでと変わっていない。

各地区の参加者の期待値からみると、ハルビンの父母の子ども能力への期待が最高で、子どもの認知能力を除いて、他の4項目への期待平均値はどれもトップである。これと対比をなすのは、南京で、父母の各項目への期待値はどれも比較的低い。根河の父母の子ども認知能力への期待は最も高い。これらのデータから、父母の子ども能力への期待は経済発展と逆相関関係を呈することがわかる。

### 2. 最も重視する問題

自由回答式質問「子どものどの方面の発達に最も関心がありますか？」について、私たちはクラスター分析を行った。おおよそ「生理保健」「栄養」「認知発達」「感情発達」「社会発達」の5つに集団化できる。その他の集団化できなかった回答は除外した。詳細な結果は図1に示した。

図1から、子どもの年齢が上がるにつれて、父母が重視する発達分野は生理保健から心理発達に変わっていくことがわかる。だが、どの年齢段階でも、認知発達への重視は感情や社会発達への重視を大きく上回っている。しかも年齢が上がるにつれて、認知発達への重視が次第に高まっていることもわかる。

## ●討論と考察

以上をまとめると、中国のさまざまな地域と経済的地位を代表する1〜6歳児の父母は、ちょうど育児の矛盾の中にあるといえる。世界

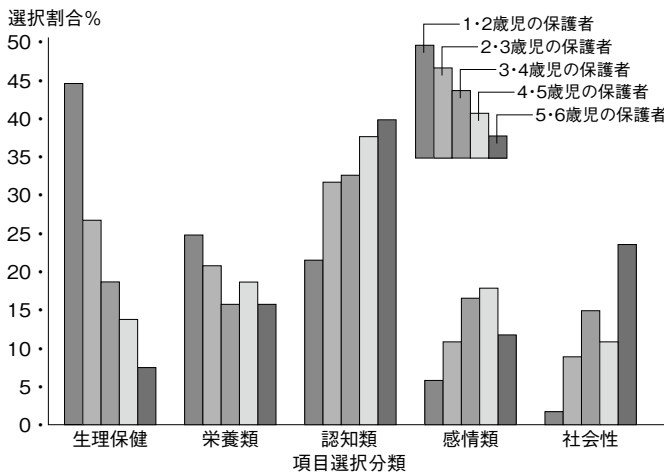
的な情報化の時代にあつて、中国の11都市の1～6歳児の父母は国際的育児理念の影響を受け、伝統的な「知力発達」への高い期待から、子どもの自律能力、ソーシャルスキル、リーダーシップの重視へと転換し、しかもこれら非認知能力への期待が認知能力への期待を上回っている。一方で、伝統的な考え方をやはり受け継いで、子どもの自立能力の発達は軽視している。育児矛盾にあるというもう一つの証拠は、児童の能力の発達への期待と実際に重視する問題との落差である。1～6歳児の父母は、どの年齢段階

でも、自分の子どもの認知発達への重視は感情面での発達や社会性の発達を上回っているのである。

この種の矛盾した心情に対し、私たちは忍耐をもって父母自身がこの種の認知衝突を解決するのを待つばかりでなく、適切な時期に、彼らに提言をして、現実と伝統、期待と重視の落差がもたらす育児矛盾の迷いから抜け出す手助けをする必要がある。

表① 11都市における父母の子どもの能力への期待の平均値

都市	自律能力	ソーシャルスキル	認知能力	自立能力	リーダーシップ
上海	4.34	4.30	3.92	3.77	4.21
長春	4.45	4.36	3.95	3.69	4.30
天津	4.36	4.34	3.96	3.65	4.14
西安	4.25	4.25	3.79	3.69	4.11
根河	4.41	4.30	4.22	3.62	4.12
ハルビン	4.50	4.45	4.08	3.81	4.39
貴陽	4.28	4.24	3.92	3.71	4.12
南京	4.25	4.20	3.95	3.69	4.07
福州	4.39	4.29	3.77	3.76	4.15
武漢	4.31	4.32	3.84	3.81	4.09
総平均	4.35	4.31	3.94	3.72	4.17



# 教育的視野の中の子どもの遊戯

華 愛華

Hua Aihua

華東師範大学副教授

1	脳の三位一体学説から情動の役割を考える
2	中国における幼児メンタルヘルス教育の実践と研究
3	人を引き込む身体的コミュニケーション
4	所有に関する行動の日中文化比較
5	ベビーマッサージとアタッチメントについての研究
6	親の期待と幼児の発達について
7	教育的視野の中の子どもの遊戯
8	赤ちゃんはヒトに興味をもつ

## ●遊戯と教学との関係

本来、遊戯と教学は異なるものである。子どもにとって、遊戯は学習であるが、学習は遊戯とは限らない。なぜなら学習には2種類ある。一つは自発的、無意識な学習で、もう一つは教学が関与する学習である。遊戯は本来、教学とは無関係であるが、学習とは切っても切れない関係である。

遊戯(遊び)は子どもの成長発達によい効果を果たすことから、教育者は教学の中で、遊戯を取り入れれば、教育効果も倍増するのではと考える。しかし、遊びが教育者の教育目的を達成するための道具になると、遊び本来

の目的でなく、特定の目的として使われてしまうので、遊びの本質である自由が奪われてしまうことになる。

## ●遊戯とは何か

### ■生物学的な視点から

- ・遊戯は動物や人にとって本能であり、天性である
- ・高等動物であればあるほど、遊戯に対する衝動が大きい
- ・遊戯は小動物にとって生存本能の訓練である

### ■哲学的な視点から

- ・遊戯とは自由意志の現れである(非功利性——外的目的がない)
  - ・自由とは心理的体験である
  - ・自己コントロール(自ら望んで)——任に堪えられるという達成感(力の及ぶ限り)
  - ※このため遊戯には非常に大きな選択的自由度があり、積極的な気持ちの体験になる
- ### ■教育学者から見た遊戯
- ・遊戯とは教育の手段の一つである
  - ・遊戯の発達の価値こそが教育の目的である
  - ・遊戯の中に教育の契機が隠れている
  - ・遊戯は教師の道具になる
  - ・自発的遊戯に対する教学を強化
  - ・遊戯の手法を用いて教学を行う

## ■発達心理学者から見た遊戯

- ・遊戯とは幼い心理の表れである、個体の成熟過程における特有の行為
- ・遊戯と個体の発達には密接な相関性がある
- ・発達を反映——発達を強固——発達を促進
- ・遊戯の発達の価値
- ・感情——現実的対立面（真のものと偽りのもの）——発散補填
- ・認知——作業的対立面（結果と過程）——代替転換

## ●幼稚園における遊戯教学の誤り

幼稚園での教育重視の遊戯に、いま、主に2つの誤りがある。

・1つ目は、**遊戯に対する感情と認知の対立**である。

遊戯の感情的価値を重視した場合、教師は遊戯に全く関与しない。しかし、遊戯の認知的価値を追及した場合、教師は遊戯に必要以上に関与し、本来の遊戯ができなくなる。

・2つ目は、**遊戯と教学の関係が入り混じること**である。

幼稚園カリキュラム改革の理念は、「幼稚園は遊戯を基本活動にすべし」である。しかし、幼稚園は就学前教育の一つであり、教学活動は必然のものであるので、遊戯と教学という2つの異なる性質の活動を融合させるために、次のような考え方になろう。「基本」は遊戯の形式で教学活動を展開しているが、「遊戯を基本活動とする」ということは、遊戯と教学が入り混じることになる。結果、多くの偽りの遊戯と発達によりパフォーマンスを重視する授業が行われ、本来の遊戯は保障されない。

ある幼稚園の子どもと親の対話を見てみよう。

親…「さっき遊んでたの?」

園児…「違う、遊んでいたんじゃないなくて遊戯していたの」

親…「遊戯して楽しいでしょう?」

園児…「でも遊戯が多すぎて、遊ぶ時間がなくなっちゃあう…」

親…「遊戯は遊びでしょう?」

園児…「遊戯は遊びじゃないよ、遊戯は先生と一緒に、先生の話をきかなくちゃいけないけど、遊びは好きなようにできるもの」

親…「でも幼稚園で遊んでいるとき、先生はいつもいっしょでしょう?」

園児…「遊んでいるときは、先生はみているだけ、何も言わないよ。」

幼稚園の子どもはなぜ「遊戯」と「遊び」をわけられるのか。幼稚園カリキュラム改革において、「幼稚園は遊戯を基本活動とする」を実践することが難しいのはなぜなのか。

## ●遊戯問題の文化的解析

### 「寓教于楽」と「寓学于楽」

中国伝統教育における遊戯に関する原則は以下のものである。「業精於勤、荒於嬉」（学業の進歩は勤勉により、後退は遊戯によるものである）。すなわち、学業の成功をおさめるには、勤勉であるべきであり、遊ぶことによつては、学業が荒廃してしまう。

また、現在では、遊びと教学について、「寓

教於楽（教にありて楽しむ）を提唱している。『寓教於楽』とは、「遊戯の中に、教えがある」こと、遊戯に教育の功利性をもたせること。「教え」という目的で遊戯をデザインしたため、子どもが遊びと認めない遊戯が頻出してしまいう皮肉な結果となった。

私は『寓学於楽（学にありて楽しむ）』を提案したい。『寓学於楽』とは、「伝えたい学習情報を遊戯の環境と素材に潜ませ、子ども一人ひとりがその中から何を獲得できるか、どれだけ獲得できるかは、各個人の特徴と環境によって決まる。そこで教師は子どもの遊びを見守り、子どもの発達レベルを把握し、必要な手助けをする。

## ●「遊戯を基本活動」にすることへの提言

1つ目は、遊戯と教学の境目をはっきりさせる。これは比較的容易に実行できる。  
2つ目は、遊戯と教学の境目をあいまいにする。すなわち、遊戯と教学の両者を融合させ、成長しあうようにする。それを実現する

には、教師の高い専門的素養が求められる。

「遊戯と教学」をいかに融合させるか。その鍵は遊戯と教学が互いに成長できることにかかっている。教学のために遊戯をデザインし、目標を遊戯の中に潜ませておく。そのため、教師には、3つの留意点と3つの能力が求められる。

※3つの留意点…

1. 目標と遊び方への配慮… 教学目標を楽しい遊び方にデザインする能力。

— 教育性を重視

2. 遊び方と遊びの楽しさへの配慮… 魅力的な結果で遊びへの興味を刺激する。

— 楽しさを追求

3. 遊びの楽しさと発達… 子どもの発達レベルに即した遊びのデザイン。

— 発達段階に適すること

※3つの能力…

遊戯で教学を促進させ、遊戯の中で教学の契機をとらえ、遊戯を中断させないために、教師は以下の能力が必要である。

1. 幼児の遊戯に含まれる発達レベルを正確

に解説する能力

2. カリキュラム目標と幼児の現在の発達を正確に判断する能力

3. 幼児の行動意欲へのサポートを前提にした臨機応変に誘導する能力

一定の専門的素養がなければ、活動の功利性により遊戯の本質が失われやすく、不適切な遊戯は幼児の遊びの権利を奪いやすいので、むしろ遊戯と教学を並列させ、教学において教え方を研究し、遊戯の中で幼児を研究するほうがよい。こうすれば現在の教師の専門的素養の形成に有効な道筋となる。



① 脳の三位一体学説から  
情動の役割を考える

② 中国における幼児  
メンタルヘルス教育の  
実践と研究

③ 人を引き込む  
身体的コミュニケーション  
シミュレーション技術

④ 所有に関する  
行動の日中文化比較

⑤ ベビーマッサージと  
アタッチメントに  
ついての研究

⑥ 親の期待と幼児の  
発達について

⑦ 教育的視野の中の  
子どもの遊戯

⑧ 赤ちゃんはヒトに  
興味をもつ

# 赤ちゃんはヒトに興味をもつ——赤ちゃんの対テレビ行動の解析より——

谷村雅子

Tanimura Masako

国立成育医療センター研究所成育社会医学研究部部長

私はテレビの子どもへの影響を研究しております。本日は、テレビに対する赤ちゃんの反応や好きなCMの特性についての研究結果を基に、赤ちゃんはヒトに最も関心をもつことをお話ししたいと思います。そして、現代社会では赤ちゃんの対人経験が少なくなっているのですが、どのようにしたら良いかを皆様と考えたいと思います。

## 1. 赤ちゃんは画面のヒトに関心をもち、親に共感を求める——集団調査・行動観察より——

赤ちゃんのテレビに対する反応を集団調査と行動観察で調べた。3カ月から24カ月の子ども1600人を対象として、テレビとの関わりについての質問紙調査を行った。その結果、3〜4カ月ではテレビの光や音に反応するだけだが、お座りができる頃にはじっと見たり音楽に合わせて身体を動かす、はいはいができるようになるテレビに近づいて行って、好きなキャラクターが登場すると喜んだり声をかけた

りし、立てるようになると登場人物の真似をする。そして、1歳半頃には一緒に見ている親に指さして質問しながら、親と一緒にテレビを楽しむようになることが示された。

次に、プレイルームで12分間のビデオを流して、0〜1歳児と親の自然状態を観察した。——**図1** 子どもはテレビがついているといういろんな反応行動をとるが、好きなキャラクターが登場すると喜んで顔を見たり、指さして質問するなど、親と一緒に見ればコミュニケーションのきっかけになる様子が観察された。そして、見る場面や見ない場面、真似したり声を出す場面が子どもたちに共通していたので、映像や内容に、子どもの反応行動やコミュニケーションを誘発しやすい特性があることが判った。

呈示したビデオは、赤ちゃんが好きな番組（赤ちゃんやぬいぐるみ人形が登場するCM、幼児番組のオープニング・人形劇・体操）と興味なさそうな番組（野球、風景、市民大学）を繋いだ。このビデオを

66場面に分けて各場面の属性を評定し、属性をもつ場面ともたない場面との間で平均視聴度を比較した結果、よく見る場面は登場人物が笑顔で視聴者の方を向いていて、逆に横向きや斜めや後向きだとあまり見ないことが判った。—— 図②

反応行動では動作や音声の模倣が頻繁に観察されたが、動作の模倣対象は、すべて画面のヒトやキャラクターで、笑顔で視聴者の方を向いており、動物の真似はしていなかった。音声の真似は、ヒトやキャラクターが発するヒトの声の言葉や歌だった。赤ちゃんは自分に笑顔で働きかけるヒトを真似するようだ。

各反応行動の後では、質問の後はもちろんだが、動作や言葉の模倣の後も、音楽に合わせて体を動かした後も、画面に微笑んだ後も、最も多い行動は親の顔を見ることだった。親はそれに対して、頷いたり誉めたり、一緒に真似したり歌ったりして応えていた。

以上のように、赤ちゃんは、自分に笑顔で働きかける画面のヒトに関心をもって、画面のヒトの行動や言葉を模倣するが、応えてくれる親に共感を求めることが判った。

## 2. 赤ちゃんは笑顔で視線を向けるヒトに最も関心をもつ

—— 好きなCMの特性解析より——

図②

視聴度と場面属性		66場面に分け、各場面の属性を評定し属性の有無間で平均視聴度を比較	
場面属性		平均視聴率 (%)	p
		該当場面	非該当
主な登場物種類	動物の登場なし	25.43	< 69.83 < .01
	動物のみ	50.21	< 70.38 .01
顔の向き	視聴者向き	75.14	> 65.95 < .01
	横向き	62.58	< 71.09 .04
表情大きさ	笑顔多い	72.99	> 64.83 .02
	クローズアップ	74.74	> 66.36 .01
音声	前奏	77.64	> 66.87 .01
	歌	73.03	> 65.51 .03
	効果音	79.02	> 67.18 .01
	明るく楽しい印象	71.60	> 60.09 .01

→ 登場人物が笑顔で視聴者の方を向いている場面をよく見る  
 ○ 横向き、斜め、後向きの場面はあまり見ない



テレビCMには多様な情報が流れるので、赤ちゃんが好きなCMの特性を調べると赤ちゃんが何に最も関心をもっているのかを知ることができるのではないかと考え、0〜1歳児1600名のテレビ視聴についての質問紙調査に記載された好みのCM44本とその前後に放映されたCM42本を録画して、属性を比較した。

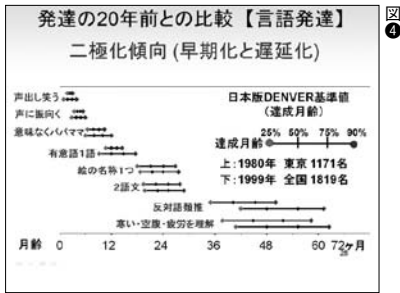
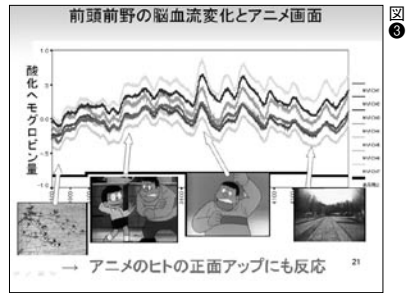
その結果、赤ちゃんが好きなCMは、赤ちゃんや子どもなどが笑顔で視聴者の方を向いて、呼びかけたり、語りかけたり、踊ったりしていて、可愛い・明るい・楽しい感じであることが示された。多変量解析では赤ちゃんが好むCMの特性として、登場人物が笑顔で視聴者の方を向いていること、CMの最初に子どもの声が聞こえることが推定された。テレビ画面から流れる大量の情報の中で、赤ちゃんは自分に笑顔の視線を向けるヒトに最も関心を示すことを示唆しているのである。

赤ちゃんが笑顔の視線を向けるヒトに関心をもつことは、多くの実験研究も報告している。例えば以下などが挙げられる。新生児が顔に似た特徴を持つ絵を長く注視した。新生児が自分の方を見つめるヒトの顔写真を、視線が逸れた顔写真より長く注視した。4カ月児が自分の方を見つめる顔写真を見た時にのみ、顔認知に関連する脳の部位が活性化した。4〜5カ月児は

母親がアイコンタクトを維持しながらあやした時に較べて、途中で視線を逸らすと母親への注視も児の微笑みも減少した。9〜13カ月児が母親の笑顔を見た時に前頭部が活性化した。成人がヒトの笑顔を見た時に眼窩前頭部が活性化した、などである。私たちも、多くの乳幼児が視聴しているビデオソフトを成人に視聴してもらって、視聴時の前頭部の脳血流を近赤外線分光測定装置で計測したところ、登場人物が視聴者方向に働きかける場面で活性化していた。

アニメでも前頭前野が活性化した場面は、ヒトやキャラクターがアップで視聴者の方を向いている場面だった。——図④ ヒトは新生児期から顔認知能力を備え、成人しても自分への笑顔の視線に関心をもって反応するものと考えられる。

では、チンパンジーではどうか、動物園のチンパンジー村で19頭のチンパンジーに初めてテレビを見た。チンパンジーたちは最初は大騒ぎでテレビの前に集まって来たが、すぐに慣れて、好奇心の強い若者が最後まで熱心に見入っていた。チンパンジーたちに見せたビデオは、自分たちと同種のチンパンジー、敵であるライオン、どちらでもないシマウマの映像だが、同種のチンパンジーに最も強く関心を示した。ヒトはヒトに、チンパンジーはチンパンジーに生物学的に最



も関心をもつのだろう。

ここまでをまとめると、ヒトは生物学的にヒトに関心をもつ。新生児期から顔認知能力を備え、大人になっても自分に向けられた視線に関心をもつと考えられる。

### 3. 現代社会における乳幼児の対人経験の減少

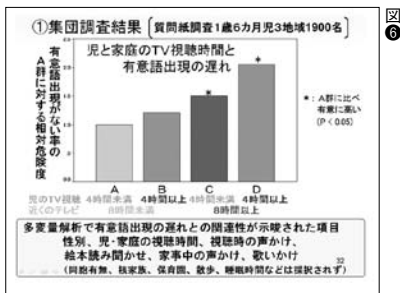
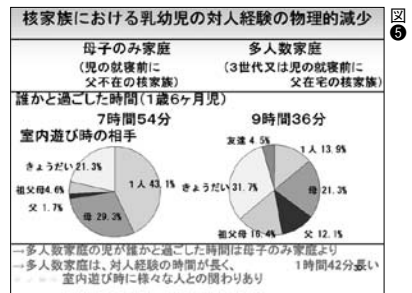
しかし、現代社会においては、乳幼児の対人経験が減少している。日本版DENVERの1980年と1999年の言語発達の基準値を比較すると、20年前に較べ、有意語を話し始める時期や二語文を話し始める時期などが遅くなっており——図④、言語発達の遅延化傾向がみられる。このような言語発達の遅延化の原因はいろいろ考えられるが、1つは日本ではこの20年で核家族化が急速に進んでいることだ。1歳6カ月児が寝る前に父親が不在であった核家庭と、三世代または子どもが寝る前に父親が帰宅していた多人数家庭を較べると、多人数家庭の子どもの方が誰かと過ごした時間が1時間42分長く、また、さまざまな人と遊んでいた。日本では、核家族化の上に父親の帰宅が遅くなったため、乳幼児の対人経験が質・量ともに物理的に減少してきた。——図④

もう1つの大きな原因は、現代社会では、テレビ・ビデオ、インターネット、携帯電話などの映像メデイ

アが普及して、乳幼児期の対人経験が減少していることだ。1歳6カ月児1900名の質問紙調査の結果、近くのテレビが長時間ついていてかつ視聴時間が長い子どもが有意語をまだ話さない率は、近くのテレビがついている時間が短くかつ視聴時間が少ない子どもの2.1倍で、長時間視聴と言語発達の遅れとの関連性がみられた。——図6

テレビ長時間視聴と言語発達の遅れとの関連性の理由を調べるため、親の発話状況を調べた。すると、テレビがついていると、歌を一緒に口ずさむことは増えるが、会話の頻度が少なく、話も短く、画面上のものの名称のみで動詞や形容詞を使った説明が少なくなっていた。テレビを親子で一緒に視聴するのは情緒的コミュニケーションのきっかけにはなるが、言語的コミュニケーションは少なくなることが示された。長時間視聴が習慣的に続くと、言語や社会性の発達が遅れる可能性が考えられる。

視聴時の反応行動やコミュニケーションの生起は視聴内容によって異なるので、子どもの好みのビデオを集め、映像・音声・内容と言語発達との関係を調べた。1歳半で有意語をまだ話さない子どもの方が多く好んでいたビデオは登場人物の視聴者への働きかけが少ないので反応行動やコミュニケーションが生じ難いけれ



ど、途切れなく続き、画面変化が多く、大人が音を消しても見続け易いものが多いので子どもも見続けやすいものと推察される。有意語を話す子どもたちに好まれていたビデオは、成人が視聴しても視聴者に語り掛けている場面で前頭前野が活性化していた。有意語をまだ話さない子どもの方が多く好んでいたビデオは、成人の前頭前野の活性がほとんどみられなかった。このような働きかけがないけれど変化が多いビデオを長時間傍観的に見ているのではないだろうか。

映像メディアの普及は、授乳時の親子関係にも影響しているようだ。現在調査中だが、授乳時にテレビを時々見る母親の率は72%、携帯を時々使う母親の率は46%を占めていた。授乳時にテレビや携帯をとくとき、またはいつも使用する家庭では、授乳中に目が合わない、誰も居なくても泣かないなど、親子関係が希薄な傾向がみられる。

以上をまとめると、赤ちゃんは自分に笑顔で働きかける人に最も興味をもち、関わりの中で、発達する。しかし、現代社会は赤ちゃんの対人経験が物理的に減少している。赤ちゃんにとって働きかけられることが重要であることを、家族も社会も認識する必要があるだろう。

# 日本グッド・トイ展示会

子どもたちの健やかな発達成長には、栄養が不可欠である。その栄養は「食事」からだけでなく、「遊び」からも得られる。子どもは遊びを通じて、心や体の能力を高め、広い世界へと想像の翼を羽ばたかせ、自身についても知るようになる。遊びの中、個性が育み、自主性や忍耐力が自然と身に付き、いろいろなことを学んでいく。そして、子どもにとって大切な「遊び」に欠かせないものが、おもちゃである。

私たち大人は、おもちゃを、感性や想像力、好奇心の育成を手助けしてくれる大切な道具と考え、子どもの成長に合わせて、五感でさまざまな刺激をキャッチし、もてる可能性を引き出してくれるおもちゃを選ぶことが必要である。

この展示会は、東京おもちゃ美術館館長、日本グッド・トイ委員会理

事長の多田千尋氏の監修のもと、日本で流通するおもちゃの中で、優秀な玩具に贈られる「グッド・トイ賞」受賞作品の中から、心や身体の成長に必要な「イマジネーション力」、「自然や科学への好奇心」、「音楽・アー

トな感性」、「運動能力」、「コミュニケーション力」の栄養素を育むことができるものを50数点厳選し、紹介した。

2009年11月2日、3日の二日間に行われ、東アジア子ども学交流プログラム会議と合わせて、中国上海の華東師範大学にて、この展示会が開かれた。大学の学生や教師を中心に、2日間で延べ500名ほどの

来場者があり、熱心に見学している姿が印象的であった。

中国おもちゃ専門家である華愛華先生がある一つの積み木玩具に魅了された。それは、黄色・オレンジ・赤・青・緑と、カラフルな四角立方体のパーツが揃っている積木である。

「子どもの発想ひとつで、さまざまな積み方ができて、立体パズルのように組み立てられる。このようなおもちゃは、子どもの想像力を育てるのに役立つ。

また木の触りもなめらかで、色が鮮やかであることから、子どもたちの興味関心を引き付ける効果も高いと思う。中国の幼稚園もこのような高品質なものをもっとたくさん取り入れていきたい」と感慨深げな様子であった。

今回の展示会は2日間という短い期間であったが、日中の学者や大学の学生が、「子どもとおもちゃ」、「子どもの遊びと学び」について考えるひとつの機会となった。

## GOOD TOY



## 小林先生の講演に関して

- 小林先生の話を聞いて、人間の脳は三つの形成段階を経ること、子どもに喜びいっばいの環境を作るべきであることがわかった。
- 人間の脳の歴史的变化と発達のカニズムから人間の情動がどこから生まれたかを話してもらい、人間の生物学的側面からの科学的な根拠があり、納得できる内容だった。
- 解剖学と医学の角度から人間の情動が生まれる原因を説明することは考えたことがなかったので、とても勉強になった。

## 朱先生の講演について

- 理論の基礎、実践の研究とデータの分析が揃っている。実際に、子どものメンタルヘルスを改善することもでき、より健康な状態を学ばせることができると思う。
- このコース (Zippy's Friends) は全国規模で展開するのがよい。こ

# 会場の声

のコースを幼稚園の日常コースに取り込み、応用することはできないかと思つた。

## 渡辺先生の講演について

- これは教育理念を科学技術に取り込んで、テクニックを教育の手段と方式として利用する斬新な発明であり、「ヒト」を重視し、「ヒト」のための発明だ。
- 「花つば」はとてもユーモラスで面白い。
- ハイテクニクスの手段を駆使し、人を引き込む技術を研究している、将来性がある。
- コンピューターによるインタラクティブな技術と関連商品の出現は、人間と人間の間のコミュニケーションに悪影響をもたらすこ

とはないのか。

## 山本先生の講演について

- すべてが印象深かった。細かいところから文化の差異を観察するのは興味深いことだ。
- 同じことに対しても文化背景が異なったら見方も違う。でもそれは正しいかどうかの問題ではない。
- 「所有行為」「所有意識」から中日の差異を分析して、とても興味深い。短い時間で中日文化の差異を教えてもらい、いろいろな角度から理解することができた。

## 沈先生の講演について

- ベビーマッサージがとても重要であるにもかかわらず、親にはまだ

十分に重視されていないようだ。どうすればよいか、アドバイスがほしい。

○母親のアタッチメントが赤ちゃんの気持ちに深い影響を与えることがわかった。ベビーマッサージの技術と注意事項についても知りたい。

## 周先生の講演について

- 高学歴、高収入の親たちが直面した困難と挑戦を提示し、親が軽視しがちな子どもの社会性と感情面などを問題として取り上げられ、興味深かった。
- 緻密な調査を通して得た結論。最も印象深いのは、両親が自らの手で育てた子どもと祖父母の手で育てられた子どもは異なるということだった。

## 華先生の講演について

- 講演の内容と実際の教育と密接な

関係があるので、今後の仕事に役立つ内容であった。

○異なる角度から「遊戯と教育」の関係について論述し、その矛盾についての説明はとてもわかりやすかった。

## 谷村先生の講演について

○実験データを通して、乳幼児は目を合わす、自分に笑う人に興味を持つということを立証し、大人は積極的に乳幼児とコミュニケーションをとる重要性を示している、説得力があった。

○子どもとテレビについて、現代社会と密接に結びついた講演だった。パワーポイントの資料もとてもよかった。考えさせられた。

○興味深い研究であった。乳幼児番組制作、おもちゃ制作についても考えさせられた。

## 子ども学について

○子どもを科学的な観点から見て、各分野の研究現状と問題を把握で

きるからこそ、対策を考え出し、養育環境を発展させることができると思った。

○子ども学の講演は興味深い。脳、心理、健康、機械(科学技術)、比較(日本と中国)などたくさんさんの角度から問題を分析するので、大変勉強になった。

○子ども学の研究は専門家たちが子どもの発達に関心を持っていることを示した。でも、中国政府の子ども学への投資は遅すぎであり、かつ少なすぎる。これから状況が変わり、もっと多くの研究者が参加することを期待している。

○「子ども学」という理念はとっても斬新で、子どもに対する専門的な研究は、生き生きとしている。

○さらに科学的な研究方法はあるが、量的な研究と質的な研究を融合し、データの裏の事実を明らかにすべきである。

## 日中の交流について

○日中文化背景の差異についてももっと知りたい。研究の結果をよ



り深く理解したい。

○このような交流は他国、他学問の研究に関する理念にふれることができ、今後の教育にたくさんさんのヒントが得られた。

○幼稚園教師の育成についてのテーマがほしい。他の国の幼稚園教諭の養成の事情や中国と異なる点、

参考になる点は何かを知りたい。

○両国の専門家が定期的に交流するのが大変有意義だと思う。中国は理論的なものを重んじ、日本は研究と発明に力を入れているので、交流は有効である。

## 「子ども学」関係用語一覧(日・英・中対照)

### ●子ども学 (Child Science, 中国語訳: 児童科学)

育児・保育・教育を中心に各分野の研究者が学問の壁を超え、一堂に集まり、子どもに取り巻く諸問題を検討し、解決に導くような糸口を探る。人文科学と自然科学の叡智を結集し、医学、脳科学、発達心理学、社会学、教育学など各分野の融合をはかりながら、環学的な構想のもとに構築される新しい学問。また、日本、中国のみならず、国際的なネットワークを構築し、国の枠にとられない研究交流活動を行うことが特徴である。

中国語では、「児童科学」と訳し、「科学的に子どものことを考え、子どもの生物学的側面と社会的な側面の両方を重視していく考えを反映している。

### ●チャイルドケアリング・デザイン (Child-Caring Design, 中国語訳: 关爱儿童设计)

子どものことを考え、子どものためにやさしい目をもって「子どもを生きる喜びいっぱいにする」ブランド・デザイン。この考え方には教具、玩具、建物のデザインのみならず、教材カリキュラム、法律、社会全体のデザインなども

含まれる。

チャイルドケアリング・デザインは貧困地域の子どもたちにとって必要だと言われているが、豊かな国々の子どもたちにとっても必要不可欠な考え方であり、その核となるのは学問としての「子ども学」である。すなわち、この考え方の実現には、各専門家の学問の壁を超えた協力が求められる。

### ●脳科学と教育 (Brain Science and Education, 中国語訳: 脑科学与教育)

日本の文部科学省は「脳科学と教育」の研究に関する検討会を立ち上げ、「教育の場における課題に対して脳科学をはじめ関係する科学は如何なる貢献ができるのか」という観点から検討する」とした。科学技術振興機構 (JST) では、2001年～09年の間で、「脳科学と教育」という研究プログラムを立ち上げ、「発達関連の多様な課題を対象とし、先端技術・自然科学と人文学・社会科学を架橋・融合した Transdisciplinary (環学的) な視点から取り組む」として、教育関連課題の根幹に迫ることを目指す」と目標を掲げた。また、ハーバード大学の P.W. Engle 教授を中心に、国際的に

著名な教育学者によって、The International Mind, Brain and Education Society (IMBES)、日本語では「国際心・脳・教育学会」とでも呼べる学会が2007年に設立され、学会誌として「Mind, Brain and Education」誌が年4冊発行されることとなった。脳科学と教育の研究はグローバル的な展開を見せしており、各国の研究者に影響を与えている。

### ●情動 (emotion, 中国語訳: 情绪)

日本語として日常的にはあまり使われないが、英語 emotion の訳語として、古くから学術用語として使われてきた。情動は大脳の内側にある古い脳である「大脳辺縁系 (limbic system)」と密接な関係がある。大脳辺縁系の中でも、扁桃体 (amygdala) が情動の発現に重要な役割を果たしていることが、これまでの研究で明らかになっている。

### ●早期閱讀 (中) (Reading, 中国語訳: 早期読書)

中国語では、書面の資料から情報を得る過程を「閱讀」という。書面資料は文字を中心としているが、記号、図表なども含まれる。早期閱讀は幼児期の閱讀を指して

いる。幼児の興味関心を考慮し、彼らに適する絵本や図書などの素材を選び、子どもが自ら本を読んだり、大人が読み聞かせをしたり、また本についての感想や意見を表現したりする活動などを指す。子どもは閱讀することによって、本を好きになる、閱讀経験を通じて、読書習慣を身につけさせることを目的としている。

### ●遊戯 (play, games, 中国語訳: 游戏)

遊戯には、大きく分けて、頭を動かすもの(知的遊戯)と体を動かすもの(スポーツ系)がある。たとえば、前者には、将棋、積み木、トランプなど。後者には、かけっこ、リレー、ボール系スポーツなどがある。これらの特徴は、グループ単位で行い、ルールや情景などが付属され、競争性を伴う。ゲームもその中の一種である。

遊戯、中国語では、通俗的に「玩(ワン)ともいう。楽しいこと、娯楽を指し、子どものルールの有無に関係なく遊ぶことを指す。本来、遊戯」と「玩」を区別して考えていなかったが、中国の一部の幼稚園では、遊戯を教育カリキュラムの中に取り入れることを強調し、遊戯の教育効果を

強調するあまりに、遊戯の本質がゆがんでしまい、幼稚園生活では、「遊戯のせいで、遊ぶ時間がなくなつた」という皮肉な結果を招いた。

### ●陳鶴琴 (Chen Heqin) と倉橋惣三 (Kurahashi Souzou)

陳鶴琴(1892-1982)は、近代中国における著名な教育家、児童心理学者、中国幼児教育の創設者。中国のフレイベルと呼ばれている。彼は青年時代にアメリカに留学し、ジョン・デューイの教育思想に触れ、モンローおよびキルパトリックの指導を受けた。アメリカ留学から帰国後、南京鼓楼幼稚園を創設し、中国の幼稚園の歴史を切り開いた。

陳と同じ時代に生きる日本の幼稚園の父で、日本のフレイベルと呼ばれる倉橋惣三(1882-1963)は、日本における著名な教育家、児童心理学者であり、日本最初の幼稚園、お茶の水女子大学付属幼稚園の創設者。日中両国でフレイベルと称された二人であるが、多くの共通点がある中で、当然異なる主張も見られる。両者の比較研究により、日中幼児教育の原点が明らかになる可能性が示唆されている。



## 東アジア子ども学交流プログラムの概要

■開催趣旨：育児・保育・教育に関係する東アジアの大学、教授の相互交換講義を支援し、子ども学の普及と国際化を目指す。その結果、子どもを取り巻く諸問題の解決や環境改善に役立つような学術活動を推進する。

■主催：チャイルド・リサーチ・ネット（CRN）、華東師範大学

■共催：(株)ベネッセコーポレーション  
ベネッセ次世代育成研究所

■後援：中華人民共和国駐日本国大使館、日本子ども学会、日本赤ちゃん学会、異文化比較学会、日中教育交流会議など

■事務局：チャイルド・リサーチ・ネット  
(<http://www.crn.or.jp>)

本プログラムは、2007年11月に上海華東師範大学で発足し、長沙、東京、杭州の開催を経て、2009年には、東京、上海で活動を行いました。本書は2009年の報告です。

[ 発行日 ] 2010年3月31日

[ 発行 ] チャイルド・リサーチ・ネット(CRN)  
〒101-8685  
東京都千代田区神田神保町1-105  
神保町三井ビル  
(株)ベネッセコーポレーション内

[ 編集人 ] 後藤憲子

[ 編集スタッフ ] CRN事務局(劉愛萍、横井理絵、  
岩崎菜穂子、桜井玲子)  
木下編集事務所

[ デザイン ] 森一典デザイン事務所、富田淳子



日本語版 <http://www.crn.or.jp>

中国語版 <http://www.crn.net.cn>

英語版 <http://www.childresearch.net>

チャイルド・リサーチ・ネットはベネッセコーポレーションの  
支援のもと運営されています。